



大震災から10年・交流の記憶⑤

いわき市に住む双葉町民が心でつながり、地元ともつながるための自治会を

大橋さんが住んでいた双葉町細谷行政区は、福島第一原子力発電所から約1.7kmの距離にあり、大震災当時45世帯160人が暮らしていた。発災時、行政区長を務めていた大橋さんはすぐに消防と連絡を取り、近隣を回って被害を確認しながら、住民をさらに内陸の山田地区公民館へ避難するよう誘導した。

それからは避難先を転々とする日々が続いた。2012年に双葉町と風土が似て身近に感じていたいわき市に住まいを構えた後も、気に掛かるのは各地に散らばってしまった細谷地区の住民のことだった。5か月かけて所を確認を行い、茨城県で「細谷の集い・交流会」を開催すると、細谷地区の住民同士が1年7か月ぶりの再会を喜び合った。

交流会後、「仮設住宅に入った人と違い、借上げ住宅の人は誰がどこに住んでいるかわからず、孤独になってしまつて感じ、自治会を作ることを決意。震災前の双葉町の行政区長ら4人を声を掛け、2013年1月に「いわきまごこ

る双葉会を発足。一定の親しい人との交流はあっても、広いいわきでなかなか会えない町民もいる。集まる場所があることで町民同士の間がつながると思った」と大橋さんは言う。

温かく受け入れてくれた いわきの方々に感謝

日帰りバス旅行やイベントへの参加など、いわきでの活動を進めるうちに、「いわきにお世話になっているので、地元の自治会とも交流したい」と思うようになり、津波で大きな被害を受けた薄磯地区の自治会に交流を申し入れた。花壇づくりや正月の餅つきにも参加、いわき七夕まつりでは、七夕飾りを共同で作り、吹き流しには両地域を象徴する塩屋埼灯台と双葉タルマの絵を描いた。いわきの人に受け入れてもらったおかげで、お互いの理解が深まり、様々な交流の輪が広がった。

「震災や原発事故で辛い思いをした反面、たくさんのお出合いがあった。長期避難を余儀なくされている今、地域になじむことは生活していく上で大切なこと。いわきの方々に温かく受け入れていただき感謝している。」と大橋さんは話す。地域とのつながりを大切に、大橋さんはこれからもいわきで活動を続けていく。



いわき・まごころ双葉会
事務局長

大橋 庸一さん

双葉町出身。震災時まで、双葉町細谷地区の行政区長を10年間務める。2013年、避難先のいわき市で「いわき・まごころ双葉会」を立ち上げ、現在は事務局長として精力的に活動中。